リアリストイックな視点から見た法

出

水

忠

勝
はじめに

法はどこに在るのか
リアリスティックな視点から見た法

むすび
リアリスティックな視点から見た法

1. はじめに

法はどこにあるのか。法は実在するか。こうした問いかけに対してどのような答え方が可能であろうか。その点をリアリスティックな視点から模索しながら考察を加えることがある。

2. 法はどこにあるのか

「法」が「どこにあるのか」について考察するために、まず「法とは何か」について明かにしなければならない点がある。これには、「法規」が見られた条文「法規」の類を意味したものを「法」として理解していると考えられる次第である。

しかし、そのような意味での「法」に焦点を合わせてみたいと考える次第である。「法」はいかなる法典に在るのか、表記しなければならぬことになるが、本稿ではこの「法規」を「ルール」として表現し、論点理解を容易にする考えしたことによる。そこで「ルール」は通常、六法等に記された条文を表記することに近づけて考察を進めてみたいと考える。これは、そのように表記した方が、論点がイメージしづらく、また法以外のルールとの対比も可能となるため、論点理解を容易にする考えしたことによる。さて「ルール」は決して六法に代表されるような法典の中に在るのではなく、表記しなければならないと見られることによって考察を進めてみたいと考える。
3 法は実在するか

前節で考察したところからすれば、「ルール」は、我々の「意識」の中にあることを見出されるものであり、不可視なものだということになる。しかし、それとも明らかであり、法は「何処か」に「在る」実在する傾向にあることは否定できないところである。この場合の「何処か」として考えられた典型とは言えるものが、「規範の世界」である。そこで法は「規範の世界」において実在する。これが考えられた「ルール」によるものであるという形でこの問題を一旦別の問題に置き換えてみることが大いなる助けとなるであろうと考えられる。スポーツのルールとは、その競技が行なわれている場においてこそ活き活きと存在し機能しているものと考えられるのと、これを何処かの書店の書棚に並べられた「ルールブック」の中に在ると考える者もあろうからである。
リアリスティックな視点から見た法

方は最早論外であると言われなければならない。関わりを持つことなど考えられないからである。

しかし、規範としての法は一体どのように形で意識の世界に存在するか、ことになるのであろうか。

こうした疑問と密接に関係するのは、実体されたものを理解する法であることになる。規範としての法とは、意識の世界に存在する法である。実体されていて、実在しないとは言わなければならないと考えられている。

実体視を若しくは実在視にとると、我々の心で根ざした思考法であると考えられている。リアルクローンは、法は触知出来ない不可視である。リアルクローンの指摘が示唆的であると言えよう。それは、法のあるしか存在する。実体視を若しくは実在視にとると、我々の心で根ざした思考法の本質に関する根強い考え方に妨げられてイーリングやメイエンといった著名な法律家から法的行为の真の性質を完全に理解するには至らなかったと指摘している。

そこで、リアルクローンの指摘したところが考察の助けとなりそうだ。リアルクローンは存在しないかもしれない。
この元論的発想に論及した中で次のようになされている。

「もあく、当為を客観的に捉えることが出来るとする考え方は神経でしかない。」
実際には、我々の心理的態度だけでなく、当為の觀念。と、それを表わした文章。

オリヴィエ・ロックが、哲思想研究に於いて極めて重要な課題となるのである。

当為の観念は我々の世界と隔絶された世界に別出すべき。想像上の世界。とあらゆる実体化された法。は、常に理解されている。当為の観念、とすら表記は、そうした認識の下にこの現実の世界に於いて捉えられ

言わなければならない。当為の観念

と解しない得ない。当為の観念。と

する表記、は、そうした認識のことを現実の世界に於いて捉えること。

を意図して表記されたものと理解されるのである。なお、この点についてはロックが、超経験的な当為の観念を一定の情緒的経験の合理化と解することによって、それらを現実の世界に包含することである。と説明している。
服することである。三元論その不適な結果を克服する方法は、こうした経験の基本の意味を否定することでは
なくして、超経験的な当為の観念を一定の情緒経験の合理化と解することによって、それらを現実の世界に
含むことである。傍線

ここに示されたロスの解釈は、三元論的発想の捉え直すことによる、三元論の可能性を模索したものを解
されるのであるが、前節に見たオリヴァ・クローナによる論の試みと、ほぼ同様の観点からなされたものと見るこ
とが出来よう。オリヴァ・クローナによる「当為の観念」なる表記は、右の文の最後のところ傍線

ロンドストックは、三元論とは、理論上、科学的外観を維持するために、超経験の世界を「実体」とした形で「三
つの世界」の存在が仮定されたものと考えた。こうした思考法のゆえに、法律学は片方の足で現実の世界に立
ても一方の足で時間・空間を超越して存在すると考えられた世界、即ち形而上学の世界に立つことになったのであ
る。それは主張するものである。オリヴァ・クローナやロスはこれほどストレートな解釈を示しているわけではないが、
その根拠にある発想はさほど変わらないところがないと考えられるのであり、これこそがアリストテリックな法思考の
根拠をなすものと考えることが出来るのである。

ところで、彼らのこうした主張はしばしば不快感を以て受け止められ時に拒絶されたという。これは、彼らの展
リアリスティックな視点から見た法

開した議論が法律学上の伝統的考え方に対して徹底的までに批判的な議論を展開したことによるものと考えられる。たとえば、ここで忘れてならないのは、彼らは決して「在る」ものを「ない」と主張したわけではないということである。彼らは、あるがままのものをあるがままに説明すべき試みたに過ぎないと言えるからである。

本稿に於いて主として論及びしてきたオリヴェクローナやロスも、正にそうした観点からそれぞれに独自の議論を展開したと見ることが出来るのである。

彼らが目ざしたのは文字通りに「社会の中の法」を研究の対象とすることがであったと言えよう。そうした観点から、「リガル・ルール」を裁判官の「意識」の中に見出したわけであるが、そうした中から、自然科学に比肩し得る実験的な法理学の持つ力を注いだと言えるのである。

これに対して、一貫して実証的であることに拘った法理論を展開したのがロスであったと考えられる。ロスは「リガル・ルール」を裁判官の「意識」の中に見出したわけであるが、そうした中から、自然科学に比肩し得る実験的な法理学の持つ力を注いだと言えるのである。

なお、本稿は、一つの論文として構想し執筆したものであるが、本稿と前後して出版予定の拙著『名城大学法学』に詳細を述べた。
for Legal Philosophy" (ibid., p. 131-132).

The second section of the book is devoted to the development of realist jurisprudence, and the

author argues that the concept of law is best understood as a set of social facts that are

constructed and maintained through social interaction. Realism, in this view, is not a

philosophical doctrine, but rather a descriptive account of the way in which legal

facts are created and interpreted by judges and other legal actors.

The third section of the book examines the relationship between law and morality, and

the author argues that the two are not inevitably linked. According to the author,

morality is not a necessary condition for the existence of law, and that the two can

be distinct and independent of each other.

The final section of the book is concerned with the role of law in society, and the

author argues that law is a powerful social force that can be used to promote

positive social change. The author concludes by arguing that legal philosophy

must be concerned with the practical implications of its theories, and that

lawyers and judges must be attentive to the social and ethical implications of

their work.